

# Principal Correspondence

## IQよりモチベーションと努力

### 超一流になるのは才能か努力か

ゲームのチェスの話です。IQ のスコアの高い子は一般的に記憶やルールの取得、戦略の立案や、実行が得意です。

最初は IQ がものを言うのですが、IQ の低い子はチェスの上達のために、追いつこうと、たくさん練習し、その習慣も身につけてきます。その子たちはやがて、それほど頑張らなくとも勝て

ていた IQ の高い子たちを追い抜いていくのです(「超一流になるのは才能か努力か?」文芸春秋、アンダース・エリクソン著/土方奈美訳)。

同じことがノーベル賞科学者でも、音楽家でも言えるようで、IQ は、さほど高くない人が多いのも事実です。生まれつき才能に恵まれたのではなく、絵を描いたり音楽を奏でたりするのが楽しいという遺伝子が後押しして、他の子より練習し、優秀な能力を身に付けるようになるのです。



### レッテル

早いうちから「飲み込みが早い! 数学の才能がある」と励まされ、追加指導などを受けると、1~2年もすると、はるかに算数などできるようになります。

一方、出だして「才能無し」というレッテルを貼られたばかりに、その後、理系分野で才能を開花する機会が失われてしまうこともあります。そうしないようにしなければなりません。

生まれつきの資質は、新たなスキルを学び始めた段階では影響しますが、実はその後の練習量や訓練などの方がはるかに重要な役割を果たすのです。

ただし、これは長時間に及ぶ退屈なトレーニングに耐えることのできる子と、すぐに気が散って投げ出してしまう子の違いもあります。

### 天才の要素

意欲(モチベーション)こそが天才の要素ではないだろうか? (「双子の遺伝子」ダイヤモンド社 ティム・スペクター著/野中香方子訳)とされています。

私たちは早い時期(臨界期前)でレッテルを貼らないように、可能性をつぶさないように注意を払い、練習や努力を続けることは一人ではなく良き集団の中でこそ継続できるということを実践していきたいと思えます。



# Principal Correspondence

## 環境と育脳

頭のでき(リチャード・E・ニスベット ダイアモンド社)という本に、アメリカの環境と知能の話が出ていました。

栄養が不足したり偏ったりしている子に、ビタミンやミネラルを与えるとIQが向上する。妊娠中の母親の、一日60ミリリットル以上のアルコール飲酒や喫煙で、その子の注意力、記憶力、推論力が低くなり学校の勉強に苦勞する。

都心のスラムなどに住む子は、郊外の中流家庭の子に比べると禿げたペンキなどにより鉛の汚染に曝される可能性が高い。さらに子どもの貧困で歯の病気、煙や汚染による喘息、近視、難聴などにもなりやすい。

諸説ありますが母乳の子はIQが6ポイント高い……。

これはアメリカの話ですが、これにドラッグなどが加わると子どもたちはどうなるのでしょうか？恐ろしい限りです。

日本ではそういうことは極端にありませんが、環境を整え、栄養バランスを考えて食事をしっかりと摂ることは大事です。人間の脳は可塑性がありますから何歳になってもよい環境の中で正しい方法で訓練していけば技能は確実に向上していきます。

70歳？から英語を勉強して塾を開いたおばあちゃんがいることはどこかで述べました(しかし大人になってからは、子どもの時のように水が染み込むように吸収しないので時間はかかります)。ですから今、子どもたちに大事なことは

- 基礎学力を反復練習して身に着けること。
- 運動をしっかりとやること。
- 遊ぶこと(コミュニケーション能力はここで発達します。)
- 音楽や絵画などの芸術に触れること。
- 自然体験を積むこと。

ご家庭でもバランスよくこの点に配慮して休日の体験活動をしていきましょう。

5月は子どもにとって最高の季節です。暑くなく寒くなく、新緑と若葉が芽吹き、いのちの輝きが増すこの季節。育脳学童では、子どもたちに、めいっぱい学び楽しんでもらえるように環境を整えて参ります。

